



2025年とはどのような社会？

地球滅亡まであと365日は、宇宙戦艦ヤマトのエンディングロールですが、2025年まであと405週が、今の日本です。団塊の世代がすべて75歳以上となる2025年には、少子高齢化がすすみ、多死時代が来ることが推計されています。1年間で亡くなる国民が150万人をこえ、今まで以上に社会課題が大きくなっていくことでしょう。社会保障費も高騰し、少子高齢化から若い人の税金負担がきわめて大きくなります。

どんな病気でもどこに住んでいても安心して人生の最期を過ごせる社会を目指すことを理念に開業して10年が経ちました。この間、多くの仲間と診療にあたる一方で、それぞれの地域で支援にあたる人に向けた学ぶ機会を届けるために、有志でエンドオブライフ・ケア協会を立ち上げました。2年目を迎えて、あらためて、やがて来る2025年にはどのような社会を描けるのでしょうか？

在宅医療は、住み慣れた地域で人生最後まで過ごすことを掲げている地域包括ケアにおいて、大切なテーマです。この数年、様々な取り組みが展開されてきましたが、まだ十分に広がりを見せません。特に看取りという課題を含むエンドオブライフ・ケアを24時間に対応することは、経済的な誘導だけでは広がらないでしょう。2025年が、少しでも希望する社会に近づけるように、このテーマを応援してくれる人を増やし、このテーマを苦手とする人を少なくする活動をしていきたいと思えます。皆様のアイデアを大いに募集します。

このテーマを応援してくれる人達

- ✓ 救急医療を守りたいと考えている人
- ✓ 在宅で過ごしたい人
- ✓ 社会保障費を抑えたいと考えている人
- ✓ いろいろなハンディーや障害を持ちながらも、自分の尊厳を守りたいと考えている人
- ✓ 苦しむ人の力になりたいと考えている人

このテーマの広がりを苦手とする人達

- ✓ 看取りに関わりたくないと考えている人
- ✓ 医療依存度が高い人と関わることを苦手とする人
- ✓ 24時間対応を負担としている人
- ✓ 法的な制限のため支援できないと考えている人
- ✓ 人が足りないからできないと考えている人

小澤竹俊

電通ソーシャルポスター展に選ばれました

めぐみ在宅クリニックの理念である、“どこに住んでいてもどんな病気でも安心して人生の最期を過ごせる社会を目指すこと”を具体的実践するため、有志で立ち上げたエンドオブライフ・ケア協会の活動が評価され、電通のソーシャルポスター展に選ばれました。そして11月に授与式がありました。

”支えたいのに「いっそ死にたい」と言われた”

この文字に続いて迷路が続きます。遠目に見ると、その迷路はベッドで休んでいる患者さんの像となります。そして、迷路に迷い込んで…エンドオブライフ・ケア協会のシンボルと協会名が書かれています。とても味わいぶかいポスターを作って頂きました。たとえ迷ったとしても、誠実に関わり続ける援助者が日本各地に広がることを夢見てこれからも活動を続けて参ります。



診療実績

	2006-2015年	2016年 1月~7月	2016年 8月	2016年 9月	2016年 10月	2016年 計	総計
訪問回数	41,344	5,645	770	767	735	7,917	49,261
自宅永眠	1,514	162	18	14	17	211	1,725
施設永眠	162	29	7	5	5	46	208
在宅 (自宅+施設)	1,676	191	25	19	22	257	1,933
病院永眠	403	43	10	15	2	70	473